

## 研究成果の紹介

スタンダードカーネーションにおける花蕾<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>の発育は気温に依存する

スタンダードカーネーション「ニューマスター」及び「ムーンライト」の花蕾における、発蕾から収穫までの期間の平均気温と発育速度<sup>※1</sup>は、線形関係にあることが認められた。

## 内容

生産者から市場等への事前の出荷情報の提供や需要期への計画的生産を行う上で、収穫日予測技術は有効な手段であると考えられる。

これまでに、スタンダードカーネーション「エクセリア」等の花蕾について、発蕾<sup>ほら</sup>い<sup>い</sup>（苞葉から蕾が露出した状態）から収穫（花卉がブラシ状に伸張した状態）までの期間の平均気温と発育速度との間に線形性があることを報告している（ひょうごの農林水産技術 No.227）。

ここでは、既報の品種以外のスタンダードカーネーション「ニューマスター」及び「ムーンライト」について、発蕾から収穫の平均気温と発育速度の線形関係の有無について検証した。幅広い気温帯で生育データ及び気温データを収集するために、換気や暖房の設定温度、定植日の異なる条件下で両品種を栽培した。生育データとして、花蕾が発蕾した日及び収穫日を記録するとともに、強制通風筒内に設置した気温センサを用いてハウス内気温を測定した。

その結果、両品種とも発蕾から収穫の平均気温と発育速度との間に決定係数の高い線形性が認められた（図）。花蕾が発蕾から収穫時期であるブラシ状態へと発育する速度は、温度上昇に比例して速まることがわかった。

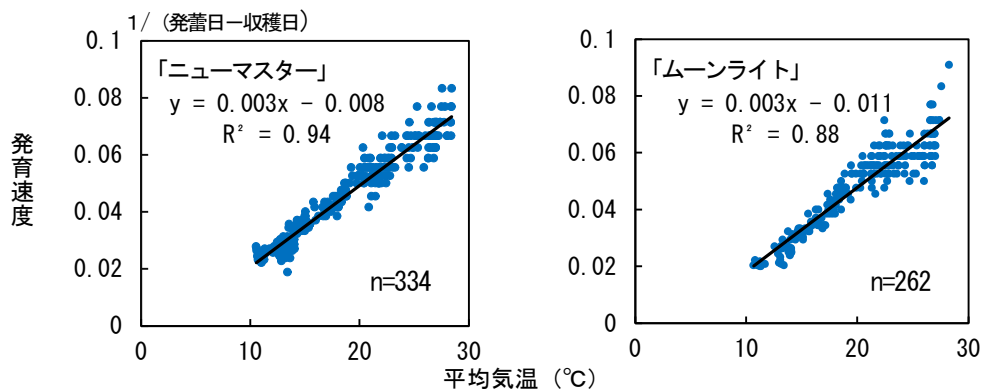


図 発蕾から収穫までの期間における平均気温と発育速度の関係

以上の結果及び既報から、スタンダードカーネーションの多くの品種において、花蕾の発育が気温に依存する可能性が示された。さらに、図の平均気温と発育速度の関係を表した一次式は、品種によって異なることもわかった。

## 今後の方針

一次式から求められる有効積算温度<sup>※2</sup>及び基底温度<sup>※3</sup>を用いて、発蕾日からハウス内気温を制御することで、目標収穫日に計画的に生産できるかどうかを検証する。

※1 発育速度：花蕾の発蕾から収穫までに要した日数の逆数。

※2 有効積算温度：日平均気温から植物の生育に必要な最低温度を差し引いた温度を合計した値。

※3 基底温度：植物の生育に必要な最低温度。

本成果については、生研支援センター「戦略的スマート農業技術の開発・改良」（JPJ011397）の助成を受けて実施したものである。

原田 正志（淡路 農業部）